

Title	ヴァレリーと「神話」：主題化されざる神話の問題の考察
Sub Title	Valéry et le Muthe : remarque sur une question indirecte du mythe
Author	村山, 俊一郎(Murayama, Shunichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1996
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.70, (1996. 6) ,p.177(50)- 192(35)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00700001-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴァレリーと「神話」

——主題化されざる神話の問題の考察——

村山 俊一郎

1

1932年11月、『精神の政治学』の演題の下に行われた講演で、ヴァレリーは、「社会、法律、政治の世界は、いずれも本質的に神話的世界 (*des mondes mythiques*) である⁽¹⁾」と言明し、社会化された人間の世界を全面的に神話の領分に引き渡した。共同体、秩序、歴史、政治などを問題にするときのヴァレリーには、対象を神話の相の下に見るこうした態度が常に認められるが、この視線の正確な意味は、神話の名が含んでいる内容を考察することによって一層明瞭になるだろう。本論では、幾つかのテキストの中でヴァレリーが神話と呼ぶ対象をその本質に還元し、この名に対応する視像を再構築する試みを通して、現代世界の諸相に向けられるヴァレリーの思想的立場をある面で要約していると思われるこの観点の性格を明らかにしてみたい。

総じてヴァレリーにとって神話とは、彼の偶像である知性の対極にある、誤謬、盲信、曖昧さなどの同義語に近く、その語に対応する明確な実質をもたないように見える。『神話に関する小書簡』の次の一節でヴァレリーは、精神の本質的特徴である精確さに対する曖昧さを、神話と呼んでいるに過ぎない。

ほんの少し多くの精確さを加えることで消滅するもの、それが神話です。厳密な視線を浴び、明敏な精神が全身にまとう明確な問いと質疑の、漸次強まりゆく集中攻撃を受けて神話は死にます。そして、曖昧

な事物と観念の群棲する場は際限もなく衰えていくのです…⁽²⁾。

だが、何らかの論証の過程で、具体的な実践を伴った神話批判が行われるときに、その方法を通じて神話の輪郭はある程度まで明瞭になるのである。ポーの『ユリイカ』を論じた1923年の『ユリイカをめぐる』の後半部分は、宇宙という曖昧な概念、および事物の起源を追究する思考態度などへの批判を通して、全体としてヴァレリーによる神話批判となっているが、この論考の前半部は、『ユリイカ』の本質が「一篇の抽象詩であり、物質的および精神的な自然の総体的な説明、すなわち宇宙創成説 (*cosmogonie*) の、現代における稀有な事例である⁽³⁾」という断定で結ばれており、論の後半部をなす神話批判への展開は、ヴァレリーの精神の内部に喚起された一つの問いをめぐるてなされている。すなわちそれは、端的には、宇宙創成説は可能かという問いであり、言い換えれば、「宇宙」は思考の問題たり得るかという問いである。

この問題を扱うヴァレリーの方法は一貫して、概念を成り立たせる根拠へと向けられている。ヴァレリーは、「われわれが宇宙と称しているこの〈全体〉の概念」(*l'idée de ce Tout que nous appelons univers*) を検討し、それが厳密な推論の対象にはなり得ない「きわめて自然な、つまり非常に不純な概念」(*notion très naturelle, c'est-à-dire très impure*) であることを証明してみせるのである⁽⁴⁾。このとき、「宇宙」を「全体」と捉え直す操作がすでに行われていることに注意しなければならない。ここには、思考のための概念を実証可能なものに帰着させること、すなわち概念の再定義が行われているのである。そして以下の証明は、思考の対象となり得る有効性をもった概念と、本質的に不純な、思考に対し無効である概念とを、それが実証可能か否かによって判別することを要旨としている。

ヴァレリーは「宇宙の最初の形態はわたしの眼に見えるものの総体によって与えられる⁽⁵⁾」として、推論の出発点を直接的な知覚、すなわち視覚のはたらきに置く。視線が見いだすある視界の内で視覚は絶えず精緻化され、拡大され、深められる。そこにある数知れぬ要素の一群はまた、複数

の別の視界においても見いだされるが、それらは目の操作によって相互に結合され、変換されることが可能であり、最終的には視像を前にした意識の中において統合されることになる。意識はそのとき、無数の要素を同時に含んだ球形空間に自らが閉ざされているかのような印象を抱く。ここに「全体」についての経験的認識が初めて可能になる。次いで、この認識の上に成り立った、すなわちわれわれの感覚に依拠する実証的な「全体」の概念に対応する「制限された、瞬間的な宇宙」(l'univers restreint et instantané)と、観念的に形成された「完全な、絶対的な宇宙」(l'univers complet et absolu)が対置される。宇宙が一つの全である限り、そのいずれもが満たされなければならない条件であるにもかかわらず、論理的には両立し得ないことは明らかである。こうしてわれわれが漠然としたイメージを抱いている「宇宙」という観念は、根底から否定されるのである。

宇宙とはしたがって、ひとつの神話的な表現 (une expression mythologique) に過ぎない。この名をめぐるわれわれの思考の運動は、完全に不規則であり、何らの連絡もないのである⁽⁶⁾。

ヴァレリーが「神話的」(mythologique, mythique)という形容を用いる場合の、一般的な用例の一つがここに示されている。すなわちこの形容は、何らかの指示対象を現実にもたない、言語にのみ依存して成立している概念に対して適用されているのである。まさしくこの点で、語そのものに意味が内在すると考える伝統的な実在論への批判に立ったヴァレリーの言語理論と、この神話批判とは軌を一にしているのである。

ジャン・セベスティクによれば、「概念をある語の意味と解するならば、ヴァレリーにとって概念は存在していない。なぜなら、意味は[ある文脈の中での使用の]直接的な結果と同じ数だけ存在しており、《語の下に概念が存在すると信じさせるのは、異なったP回の連続ないしは文の中での同一の語の使用》に過ぎないからである⁽⁷⁾」という。つまり語義は、無数

の反復の集積から一つの近似値として現れるのであって、そうした文脈の中での使用を離れた単独の語を思惟することは、ヴァレリーにとっては倒錯に等しいことである。彼の哲学への軽蔑が、伝統的な哲学的思考がこの倒錯の上に成立しているという観察にもとづいたものであることは広く知られているとおりである⁽⁸⁾。言語は、思考の表現を人間に可能ならしめる唯一の道具であるが、それが可能な限り直接的に思考を媒介することを求め、その機能、限界を考察しようとするところにヴァレリーの言語理論は端を発している。厳密に定義された公理から成り立つ数学言語を想定しつつ、一つのシステム言語を夢見たヴァレリーは、一方で自然言語の限界を、それらの概念（意味）が恣意性、不定性の上に成立している点に見ていたのである。ヴァレリーの神話の観点の基層を構成する要素の一つに、こうした言語批判があったことはこれで明らかであろう。

ヴァレリーがある種概念を指して「神話的」と呼ぶことは、単に自然言語の不純性を指摘するにとどまらず、明確な指示対象をもたない概念が往々にして思考を誤った方向へ導く危険をあらかじめ回避するための、言わば戦略的な意図がこめられている。それが必要であるのは、システム言語を創造する企てが実現不可能な試みである以上、実証可能な概念を厳格な定義にもとづいて行使する方向が、現実には選ばれることになるからである。「神話的」とはしたがって、こうした実践的な言語運用の過程から生じた、実証性をもたない一切の概念に対する無効性の指標であるといえる。

2

1928年の『神話に関する小書簡』において、ヴァレリーは神話を独立した主題として本格的に扱っている。その中でヴァレリーが神話に与えている次のような説明は、すでに『ユリイカをめぐって』で予見的に示されていた問題をさらに発展させたものと考えることができる。

神話とは、言葉 (parole) に起因することによってのみ存在し、存続

するあらゆるものの名なのです。どれほど晦渋な言説 (discour), どれほど奇妙なうわさ話 (racontar), どれほど支離滅裂な話 (propos) でもそれに何らかの意味を与えることのできないようなものはありません。最も奇怪な言辭にも意味を与える一つの仮定というものが常にあるのです⁽⁹⁾。

一見したところでは、神話に対する定義のように思われるが、むしろここでヴァレリーは、「神話的」という形容語の適用可能な範囲を画定するかたちで、神話を規定しているのである⁽¹⁰⁾。この語は『ユリイカをめぐる』では、言語によってのみ成り立つ概念に限定されて用いられていたが、ここでは、存在を言語によって支えられているあらゆる現象にまで対象を拡大している。つまりヴァレリーはこのテキストで、「神話的」という語がすでに含んでいた、言語に内在する本質的な不純性の認識にもとづいて、神話を一つの存在として明確に対象化しているのである。このように確定された神話の問題の領域は、現実内で観察されるさまざまな言語現象を含んでいるのみならず、過去と未来への信用に基礎をもつ時間という存在や、歴史、あるいはある種の言語をも取り込んで成立している。

明日は神話であり、宇宙も神話であることを思ってください。数も愛も現実も無限も、正義も民族も詩も…地球すらも神話であることを⁽¹¹⁾！

しかしいっそう重要なことは、この問題の確立そのものが、神話の領域がそれまでの思考と言語との関係から、社会と言語との関係へ移行する契機となっているということである⁽¹²⁾。「社会と言語はおのおのの存在を依存しあう関係にある。言語なくして社会はなく、社会なくしては言語もない⁽¹³⁾」という記述が『カイエ』の中に見いだされるように、ヴァレリーにとって、言語によって存在し、存続する最大の事象は人間の社会なのである。社会が言語の上に成り立っているという認識に、言語の生理に根差

しつつ存在するものを内容とした神話の枠組みが加われば、神話の問題の領域は必然的に、言語の力によって支配される社会にその固有の場を定めることになるのである。神話が言語によって存在するとヴァレリーが明言したこの時点で、社会を神話的世界ととらえる観点は成立したと考えてよい。

新たに神話の領域とされた社会に対しても、不純な概念に向けられる方法的な批判は一貫している。主に政治論の分野で繰り返し現れる、一般通用の概念の有効性を問う方法は、神話批判以来のこの観点の一貫性を示すものと考えられる⁽¹⁴⁾。『ヨーロッパの盛衰に関する覚書』の中で、「国民」(nation)という観念に対し、ヴァレリーは不信感をこめて次のようにいっている。

この概念は、熟考の対象としては複雑で取りとめないものであると同じ分だけ、使用においてはわれわれに馴染み深く、心情の中に現存しもするのである。だが、非常な重要性をもつ語はいずれもこのようなものである。われわれはいとも手易く権利 (droit) や、民族 (race) や、所有権 (propriété) について語る。だが権利とは、民族とは、所有権とはそもそも何であるか。われわれはそれを知っており、また知らないのである⁽¹⁵⁾！

ここには『ユリイカをめぐる』で見られた概念批判がそのままのかたちで継続されているが、ヴァレリーの批判に内在する意味は異なってきた。ヴァレリーは、ある特殊な言説の領域内での言語の使用が、正常な伝達機能の範囲を逸脱し、その結果特別な力を加えるに至った状況を観察しているのである。言語とは、社会と相関関係に置かれた場合、その社会内部で流通し、最終的にある価値に変換されることを目的とした、その意味でしばしばヴァレリーによって貨幣に擬せられた、交換のための記号である。そうした記号としての言語は本来、ある行為に転化されれば、役割を終え解消されるべき媒体に過ぎない。それが、誤って価値そのものと見

なされたときに起こる一種の偶像化の危険をヴァレリーはここで告発しているのである。ここに列挙されている「国民」、「権利」、「民族」、「所有権」などの語は、いずれも正常な意味作用を逸脱し、ドグマティックな言語空間を形成してわれわれをその中に閉じ込め感化する傾向をもつが、そうした状況は、言語が記号に過ぎないという事実が忘却され、実在そのものと混同されることから生じ、交換可能な価値以上の価値をそれに与えるという濫用が行われる結果である⁽¹⁶⁾。そこに、これらの語の周縁に歴史的に蓄積された心理的負荷の力が加わることで、言語が現実の力を行使する状況が生まれるのである。このように言語がある種の権力を生じさせ、保存する機能を有しているという事実に、ヴァレリーの言語批判は向けられている。

以上のような考察にもとづいて、『精神の政治学』の記述を読むとき、そこに描き出されている逆説をはらんだ人間の世界が、ヴァレリーが形成した一貫した観点をとおして結像していることが理解されよう。

私はまず次のようにいいたい、社会の構造全体は信用 (*croyance*) ないし信頼 (*confiance*) の上に基礎づけられている、と。すべて権力はこれらの心理的特性の上に打ち樹てられている。社会、法律、政治の世界はいずれも、本質的に神話的世界である、ということができよう。すなわち、それらの世界を構成している法則、基盤、関係が、事物の観察や、実証の手續きや直接的な知覚といったものによって与えられておらず、示されてもいないような世界であり、それらはあべこべにわれわれの側から、存在 (*existence*) と、力 (*force*) と、われわれを強制したり抑制したりする作用 (*action d'impulsion et de contrainte*) を受け取っているのである⁽¹⁷⁾。

ここに見られるように、社会、政治を対象とするヴァレリーの考察の最大の主題は、それらを一つの力の体系ととらえた場合の、権力の基礎的構造の解明にあると思われるが、そこでも、ヴァレリーはまず、権力を支え

る基盤に心理的な要因を見いだし、それが言語作用と結合しあうことで、本来は実体のないものに現勢的な力を付与している様態を観察しているのである。その根底にヴァレリーは、権力の実体をなしているものがわれわれの与えている信用であり、われわれを拘束する社会的諸力が実はわれわれの側の心理に由来しているという逆説を見ている⁽¹⁸⁾。知性の立場からすると信用に値しない、曖昧な事物への信用が、この世界を存続させる最大の条件となっているが、こうした信用が、根本的には言語への信頼に他ならないことを見透すところに神話の観点の普遍性がある。ヴァレリーによって「神話的」と呼ばれているのは、正常な機能から逸脱した言語が心理的要素の介在によって支配する世界なのである。

要するにヴァレリーが用いる「神話的」という語の意味は、言語があくまでその本来の機能に即して使用されることを要求する立場によって裏付けられており、それが逸脱する状況を厳しく拒絶する態度が、こうした否定の作用をはらんだ用法に結実しているのである。そしてそれが複雑な現代世界全般の分析に応用されて主導的な観点となったことは、ある意味で、すべてを言語の問題に収斂させて一挙に本質を闡明することを主軸とした、ヴァレリーの方法の根本的な性格に由来しているのである。

3

しかしながら、神話がこのように言語を対象にした問題の領域に最終的に吸収されることで、それ自らの実体を最初からもたない言わば操作的な観念であると考えるのは正確ではないだろう。『神話に関する小書簡』の中でヴァレリーは、「われわれの言語全体は、つかの間の小さな夢が集まってできている⁽¹⁹⁾」と書いた。この短い省察は、ヴァレリーの神話の観念に夢の基層が存在していることを暗示する一例であるが、この基層となる部分が本質的であるにもかかわらず顕在化しないのは、神話がテキストの中で明示される場合にはほとんど常に、主に形容詞の機能にもとづいて、「神話的」と形容される存在との関係の中で問題化されているからである。そこで視点を変え、テキストの中で神話が名詞として、つまり事実

上の主語に近い機能を担っている部分を考察の対象とし、ヴァレリーにおける神話の問題のもう一つの位相を明らかにしてみたい。

前に取り上げた二つのテキストから、神話が命題化されている表現を幾つか抽出してみると、それが常に、言わば不在の場において生起していることが確認される。

AU COMMENCEMENT ÉTAIT LA FABLE.

「始めに神話ありき。」(『ユリイカをめぐって』)⁽²⁰⁾

Quant à l'idée d'un commencement, (….) elle est nécessairement un mythe.

始まりという考えは (….) 必然的に神話となる。(同)⁽²¹⁾

Mythe est le nom de tout ce qui n'existe et ne subsiste qu'ayant la parole pour cause.

神話とは言葉に起因することによってのみ存在し、存続するあらゆるものの名なのです。(『神話に関する小書簡』)⁽²²⁾

このように、それが思念の中に形成された起源であれ、言葉にのみ依拠する存在の様態であれ、いずれの場合も現実に対しては不在でしかない場に存在する一種の虚構が問題になっている。ヴァレリーはこれを、人間の精神の本質的な機能として説明するのである。その場合の精神と神話との関係は、次の引用が示すような、純然たる創造の運動として捉えられる。

(….) それ [精神] は創造するばかりでなく、(….) それに加えて見せかけの創造を行います。精神は真実から虚偽を構成します。生命や現実とは瞬間の中においてのみ繁殖するのですが、精神は神話の神話、神話の無限——〈時間〉を作り上げるのです。

しかし虚偽と時間とは、何らかの技巧なしには存在しません。言葉

は、そうした虚無の中で増殖するための手段となるのです⁽²³⁾。

しかし神話が一種の虚構として不在 absence と一体化して現れるのであれば、その存在は通常感覚をもってしては捉えることができないことは明らかであり、したがってその存在に対応しているのは、集中された思考の働き、すなわち精神の機能である。その場合、精神はまず、虚構が生成される仕組みないしはその法則がいかなるものかを探究の課題とするだろう。そのとき虚構を成立させるものがほかならぬ精神そのものであることが明らかになる。つまり、不在の領域に属する問題は、創造的な精神がはらむ変換の可能性に関係づけられて抽象化されるのである。言い換えれば、知覚によって形成される現在に対しては不在としてしか現前しない存在を厳密に認識するためには、多かれ少なかれ何らかのかたちでその存在の条件になっている精神の一般的な機能に還元し、いわば逆行的にとらえるしかない。それは不可避免的に、その虚構が精神の機能から直接的に生じたかのような錯覚をもたらすが、しかし事実は決してそうではない。精神と虚構との関係は、その関係を観察する精神が外部に前提されることで成立するのであるから、直接的ではなく、むしろ対比的であり、相関的である。問題は、精神とは切り離すことのできない関係を持ち、しかも精神に対して外部的に存在するものの構造を透視的に把握することであり、そのためには精神の可能性を延長し、その投射によって対象を置き換える必要がある。こうして、精神の本質的能力である変換・変形作用がその不在の空間を埋めることになるのである⁽²⁴⁾。次の記述はそのように解釈されなければならない。

——事物の起源に関する思考のすべては、現にある事物の配置について夢想すること (une rêverie de leur disposition actuelle) にしか過ぎず、それは現実の一種の弱体化 (une manière de dégénérescence du réel) であり、あるがままのものの変更 (une variation sur ce qui est) に過ぎない⁽²⁵⁾。

この一節は、虚構（神話）の内容を説明するのではなく、精神が虚構を産み出す仕組みを捉えたものである。ここでは起源をめぐる思考、つまり神話的思考が、ある空虚の上に精神の能力を投影させるかたちでの思考の方法として見いだされている。だがこの場合、「改変」とは精神がみずからの変換能力の可能性に即して行ういわば擬態を跡づけているに過ぎず、したがって精神が精神を見いだしているのみであるような、この円環的に回帰する認識の空間の内部では、実は何事も生起してはいない。その意味で神話はこの空間の外に取り残されるのである。

しかしながら唯一、夢想 (rêverie) という語——それは精神の変形作用をそのように捉えているのだが——が外部への参照の可能性を保存しており、それが結果的にこの変形の作用に内実を与え、一つの意味を付け加えていると思われる。つまりここでヴァレリーは、神話という虚構の問題に隣接させて、夢という一つの体系を措定しているのである。覚醒状態の意識にとって同じように不在の場として現れる、眠りという領域で生じる夢の探究において、意識に課せられる条件は、「覚醒時の変形によって夢を構築する」(《construire le rêve par altération de la veille》)⁽²⁶⁾ ことである。したがって、いずれも本質的には存在しない対象を前にした思考の活動が変形作用というかたちをとるという点で、夢と神話は意識に対して完全なアナロジーを形成することになる。ヴァレリーにとって、こうした不在の領域を思考するための最も有効な手段は、夢への参照であったといえるだろう。

4

夢の探究に向けられた膨大な『カイエ』の断章群の間に次のような記述を見いだすとき、神話の本質はある面で、夢の実質を分有していると考えざるを得ない。この断章では、全体としては夢の法則を共有しながらも、覚醒時の中に深く根を下ろし、その内部の諸条件と相互的に支えあう関係をもった、一種の白日夢 (rêve-éveillé) の存在が指摘されており、ヴァ

レリーが神話という名の下に見ていた存在とほぼ重なり合う。

覚醒状態ではしかしながら、すべてがそのような体系に照合され得るわけではない。——そこでもわれわれは夢を見る——だが完全な夢ではなく——完結した幾つかの交換 (les échanges finis) と多かれ少なかれ共存し、それらを支えかつそれらに支えられているような夢である。

この種の白日夢 (rêve-éveillé) の中で最も注目すべきは《時間》という創造的不在 (l'absence créatrice) ——すなわち過去と未来である——それらは確信 (croyance) に伴われている、つまり現勢的な心情の感覚と行動の力によって伴われているのである⁽²⁷⁾。

補足的な説明を加えると、この引用部分の直前で、ヴァレリーはある知覚ないし感覚が言語的な位相をもった体系に照合され、その内部で説明され得ることを覚醒時の特徴とみなしており⁽²⁸⁾、同じ内容はまた別のところでは、われわれが熟慮され計算された行為を、そのためのすべての条件を一定の言葉によって表現し、遂行することが、夢から目覚めへ移行することであるというように動態的に述べられている⁽²⁹⁾。こうした行為その他によって分節される諸関係から成る複数の変換群が並置されるのが覚醒状態であるのに対して、夢は組合せを一般的な法則とし、すべてが組合せられて果てしない連鎖を作るものとして考えられている。ここでの「白日夢」は、覚醒時において認められるそうした結合の法則によって成り立つ現象のことであろう。時間がその最も顕著な例とされるのは、それが因果関係という単純な結合作用を本質としているからである⁽³⁰⁾。前に引用した一節では、時間が精神の創造する虚構であり、最大の神話であると断定されたが、そこでヴァレリーが見ているものは全く同一の現象である。

夢と神話はこのように、ある意味では同質的な存在である。それらは問題の領域の違いに応じて、異なった位相を示しているに過ぎない。要するに神話の問題の根本を形成しているのは、ヴァレリーの認識の対象となっ

た夢が覚醒時の変形であったように、精神が現実を変形することによって創造するすべての現象なのであり、言うまでもなくそれは単純な不在ではなく、ヴァレリーが時間を指して用いた「創造的不在」(*l'absence créatrice*) という表現が正確に言い表しているとおり、その存在、存続に精神が能動的に関与しているような不在の現象である。神話も白日夢も、あるいはそれが単に夢と呼ばれる場合でも、意味するものは常に、現実と虚無との臨界に現れるこのような事象のことなのであり、極限まで高められた認識の作用が、現実の中で出会う不在の領域を断面化して示したとき、虚無と接するその切断面に見いだされるものこそ、ヴァレリーが神話と呼ぶものにほかならない⁽³¹⁾。端的に言えば、ヴァレリーが認識の目を現実に向けたとき、最初に見いだすものは、神話なのである。

神話の問題はこのように、精神による変換や、精神が生産する虚構などの問題を基礎的に扱う言語および夢という、ヴァレリーにとって最も基本的な思考の作業に結びついている。そうした思考作業は、精神にとっての可能性の領域である不在を熟視することを意味しており、そこに神話の原型的な視像が形成されていたと考えるならば、神話の観点とは、現実に対してその視像を投影させるところに成立する。概念批判に示された言語的位相が神話の問題の構造面に即した現れであったのに対し、神話の視像は潜在的な別の位相として、この視像そのものの秘密を明らかにしているように思われる。すなわち、現代世界を凝視するヴァレリーの眼は、現実を夢との対照において捉えつつ、直覚的にそれらを神話化していたのではなからうか、と推測されるのである。

注

本論で用いたテキストの引用は以下による。

- ・ *Œuvres de Paul Valéry*, tome I et II, édition établie par Jean Hytier, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1957, 1960.
- ・ Paul Valéry: *Cahiers*, tome II, édition établie par Judith Robinson-Valéry, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974.

以上を註では OE. I, OE. II および C. II と略記する。数字はページを示す。

なお、引用文の訳出はすべて、邦訳のヴァレリー全集（筑摩書房、作品篇14巻、1977-79、カイエ篇9巻、1980-83）を参照しつつ、論者が行った。

(1) Œ. I, 1033.

(2) *Ibid.*, 964.

(3) *Ibid.*, 861.

(4) *Ibid.*, 864.

(5) *Ibid.*, 864.

(6) *Ibid.*, 866.

(7) Jan Sebestik : *Confluences valéryennes in Valéry, la logique, le langage*, SUD, 1988, pp. 21.

(8) 多くの研究者によって指摘されている点であるが、例えば Judith Robinson-Valéry は次のように述べている。

《C' est dans cette critique du langage qu'on peut découvrir le sens le plus profond des nombreuses attaques de Valéry contre la philosophie. (...) Presque tous les problèmes traditionnels de la philosophie sont nés, d'après Valéry, du sentiment qu'il y a au fond des mots quelque secret précieux, quelque trésor de pensée que l'esprit doit essayer de trouver et d'extraire (...).》(*L'analyse de l'esprit dans les Cahiers de Valéry*, José Corti, 1963, pp. 13-14.)

(9) Œ. I, 963-964.

(10) ヴァレリーにとって神話という語は、一個の名辞としては存在せず、mythique という形容詞にもとづいて、それが適用される存在に対し事後的に与えられる一種の総称である。

(11) Œ. I, 965.

(12) この移行の過程は1926年の『ペルシャ人の手紙への序』を中間におくと、段階的に進行していたことがわかる。この中でヴァレリーは、秩序化された人間の社会を「虚構の帝国」(*l'empire des fictions*) であるとする見解を提示した上で、社会秩序を存続させる虚構の力の実体に言及し、それを言語と想像力の機能に帰している。

《Mais le tout ne subsiste que par la puissance des images et des mots. Il est indispensable à l'ordre qu'un homme se sente sur le point même d'être pendu quand il est sur le point de mériter de l'être. S'il n'accorde un grand crédit à cette image, bientôt tout s'écroule.》(Œ. I, 509.)

これを見る限り、社会が神話的存在であるとする認識はすでに、この段階で確立していたと考えることができるが、そこにはまだ「神話的」という表現が用いられていない。それが現れるためには、神話が言語

によって存在するという、神話の視像の確定が必要だったのである。

- (13) C. II, 1529.
- (14) ある意味で、われわれが問題にする神話の観点はこの点に立脚している。Michel Jarrety は、ここにヴァレリーの言語理論と政治論とを総合する可能性を認め、「唯名論」nominalisme という広範な射程をもった概念を提示している。(Cf. *Individu, langage, société* in *Littérature moderne 2*-Paul Valéry, Champion-Slatkine, 1991.)
- (15) Œ. II, 932.
- (16) この問題に関しては Jarrety の前掲の論文に詳しい。
- (17) Œ. I, 1033.
- (18) 個人と社会とのこの逆説的な関係をとらえる認識は、晩年に至ってさらに尖鋭になった。1942年に記された『カイエ』の一節では、個人の内部がすでに社会によって完全に構造化されている様相が描き出されている。
- 《Le problème de la Société. Elle est un *Implexe* acquis. Une correspondance dans Chaque Un—des impulsions, besoins, idées avec les réponses virtuelles—images d’actes.
- En chaque Un—la Société est une idée vague, accompagnée de quantité de prévisions de détail, d’associations de possibilités d’action ou d’impossibilités,
- Un univers d’écriteaux—Danger! Secours!》(C. II, 1528.)
- (19) Œ. I, 965. テクストのこの箇所は十分な説明のなされない断定の連続であるが、注意深く読めば、神話と夢と言語が内密なアナロジーを形成していることが指摘できる。
- (20) Œ. I, 867. この銘句はヴァレリーの現実認識の本質を要約するものと考えられているが、本論では詳しく触れなかった。神話的思考がヴァレリーの思考態度に関する一般的な問題として扱われる場合、例えば哲学的な文脈の中で方法的な精神と神話的精神を対立させ、ヴァレリーにおいてその一種の止揚を見るアプローチがある (Cf. Édouard Gaède: *Nietzsche et Valéry*, Gallimard, 1962, chp. V.). ヴァレリー自身は『樹についての対話』において文学的形態でこれを端的に表現している。その中で、現実に対する認識様式を《Pourquoi》と《Comment》という二つの問い方に要約し、二人の登場人物の各々に具現させている。つまり神話的思考とは、現実に対し《Pourquoi》と問う発想そのものと把握できよう。(Cf. Pierre Laurette: *Le thème de l’arbre chez Paul Valéry*, Klincksieck, 1967, pp. 63-64.)
- (21) Œ. I, 863-864.

- (22) *Ibid.*, 963-964.
- (23) *Ibid.*, 963.
- (24) 投射という精神のプロセスが、精神の一般的な性質として客体的にとらえられたとき、「神話の世界」を構成する諸事物の神話的な性質の意味が次のように表現されるのである。
 《(…)tout cela est de nature entièrement mythique, en ce sens que tout cela s'appuie entièrement sur la propriété cardinale de nos esprits de ne pas traiter comme choses de l'esprit des choses qui ne sont QUE DE L'ESPRIT.》(Œ. I, 1033.)
- (25) Œ. I, 863.
- (26) C. II, 163.
- (27) *Ibid.*, 152.
- (28) 《La veille est avant tout la possibilité de référence d'une sensation à un système qui la localise et 《l'explique》 en termes finis.》(C. II, 152.)
- (29) Cf. C. II, 54-55.
- (30) 夢と同質的な覚醒時の様態は、一種の因果関係としてとらえられている。《Je ne puis conserver l'ambiguïté, les synthèses de fait—dues à la simultanéité pure et simple : la causalité apparente de succession (post hoc).》(C. II, 54-55.)
- (31) ヴァレリーにおける神話の問題の根底には、すべてを明晰に見ることを可能にする認識の観点を構築する企てから生じる、負の側面としての否定性が存在している。一つの神話的創作であった『蛇の素描』に見られる次の詩句は、その完璧な表現である
 《Tu gardes les cœurs de connaître
 Que l'univers n'est qu'un défaut
 Dans la pureté du Non-être!》(Œ. I, 139.)